

〔果樹〕

1. 常緑果樹

1) 温州ミカン

九州の温州ミカンは表年にあたったが、梅雨時の日照不足と夏季の高温により生理落果が多発して当初予想された程には生産量は伸びず、極早生は熊本でやや豊作となった一方、宮崎と鹿児島でやや不作、長崎で平年並みとなった。また、早生と普通温州はともに平年並みからやや豊作であった。

発芽期は初春期の低温により概ね遅く、開花期も3日～7日遅かった。着花量は宮崎と鹿児島の極早生でやや少なかった他は多かった。成熟期は概ね平年並みであった。果実は着果数減少により肥大が進んで大玉傾向となり、平年に比べ最大で110%程度の高い肥大率を示した。

夏秋期が平年よりも多雨となったため、減酸が進んだ一方で糖度は平年並みかやや低く、総じて甘味が薄いものの食べやすいミカンとなった。

2) 「不知火」系統品種

熊本では11日遅く発芽期を迎え、開花も6日遅れた。果実の肥大は平年並み、成熟期は若干遅れ、糖度も低かった。減酸は平年並み、生産量は前年比125%でやや豊作となった。晩秋期からの乾燥でコハン症が散見された。また、2月初頭の低温により未収穫の果実が凍害を被った。

3) ポンカン

大分では発芽・開花とも3～5日程度遅れた。着花量ならびに生産量は平年並みとなった。成熟期は平年並みで、果実肥大は良好、減酸が進んだ一方で糖度は低くなった。

4) ヒュウガナツ

宮崎では発芽・開花とも10日程度遅れた。着花量ならびに生産量は平年並みとなった。果実肥大は良好で減酸が早く、糖度も平年並みとなったため、食味良好となった。しかし、冬期の記録的な低温で凍害を被り、落果やす上がり最大20%程度発生した。

5) 甘夏

発芽・開花共に6～11日遅れた。果実の大きさ・成熟期・糖度は概ね平年並であったが、一部地域で寒波による苦味・す上がりなどの障害が発生した。

6) ビワ

長崎の「茂木」は冬季低温により開花が大幅に遅れ、成熟も10日程度遅れた。収穫期に梅雨入りしたため腐敗果が多発し、前年比68%とやや不作となった。果実肥大は不良、糖度も低くなり食味はやや不良であった。鹿児島でも開花・成熟共に遅れ、果実肥大は平年並みだったものの糖度が低く、食味はやや不良となった。

2. 落葉果樹

1) ナシ

発芽は平年に比べ遅れたが、開花は宮崎の「豊水」を除き平年並みかやや遅くなった。着花量は平年並み、生産量も概ね平年並みであったが、宮崎の「豊水」は豊作となった。果実は概ね平年並みの大きさとなったが、熊本の露地栽培「幸水」は不良であった。糖度は平年並みかやや高く、減酸も平年並みに進み、食味は平年並みから良好であった。

2) カキ

発芽・開花ともに平年よりやや遅れた。雌花は福岡の「富有」ではやや多かったが、開花期には訪花昆虫の活動が鈍く受粉が不調であったこと、また、6月中旬が例年になく日照不足であったことから生理落果が多く、生産量は前年比86%で不作となった。一方、熊本「大秋」では雌花がやや少なかったものの生産量ではやや豊作となった。果実の大きさは「富有」、「大秋」とも平年並み、糖度も高く食味は良好となった。

3) ブドウ

発芽は鹿児島で平年並み、長崎で8日早かった一方、他では最大10日程度遅れた。開花は鹿児島で平年並み、大分でやや早かった一方、他では最大7日遅れた。果実肥大は長崎と宮崎で平年並みの他は開花後の日照不足により不良となった。糖度は平年並みあるいは高く、食味は概ね平年並みとなった。梅雨明けが早い一方で夜温が低く経過したため着色は良好であった。5月開花期の低温による結実不良、8月中旬の多雨による裂果・病害発生等で過半の県で不作となった。

4) モモ

開花・成熟期とも一週間程度遅れた。果実肥大は福岡で平年並み、熊本では不良であった。糖度も福岡で平年並み、熊本では低かったものの食味は平年並みとなった。生産量は熊本で平年並みであった一方、福岡では前年比76%にとどまった。

5) クリ

熊本では発芽、開花とも遅れ、雌花は平年よりもやや少なかった。果実肥大は良好で糖度は平年並み、食味は良好であった。生産量は前年比92%となった。

6) キウイ

福岡では発芽、開花とも遅れた。着花量は平年並みであったが、開花期の低温と降雨により受精不良となったため小玉や奇形果が多発し、生産量は前年比60%の不作となった。糖度は高く収穫時の酸含量も低かったため食味は良好となった。

7) イチジク

福岡では発芽・成熟期ともにやや遅れた。糖度は高く食味良好だったものの果実肥大が不良でやや不作となった。凍害による樹体枯死が発生した。

(果樹研究所 カンキツ研究口之津拠点 カンキツ研究調整監 塩谷 浩)